

住居形態の変遷

住居跡(じゅうきょうきょうあ)は、旧石器時代でも発見されていますが稀であり、狩猟を行いががらの移動生活を営んでいました。縄文時代に入ると土器の発明による生活様式の変化により定住化が進み、早期(約10,000~6,000年前)になると徐々に住居跡も普遍的に構築され始め、前期(約6,000~5,000年前)には定型化、定着化していきます。竪穴住居は、全時代を通して方形の形が主流を占めますが、縄文時代中期から後期には

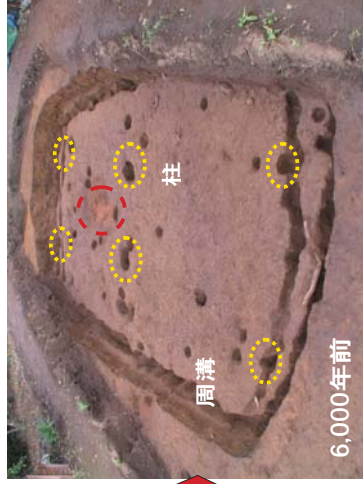
一時的に円形の住居となり、後期から晩期には入口施設も構築され始めます。弥生時代の住居跡は現在発見されていません。この時代に小判型(円形)の住居が造られる時期もありますが、基本的には方形の住居が造られます。この時期から「貯蔵穴(ちよぞうけつ)と呼ばれる貯蔵用の穴が住居内に作られ始め、古墳時代後期には竈(かまど)が造られるようになり、現代へと続く機能を持つようになりました。



7,000年前

縄文時代早期の住居跡

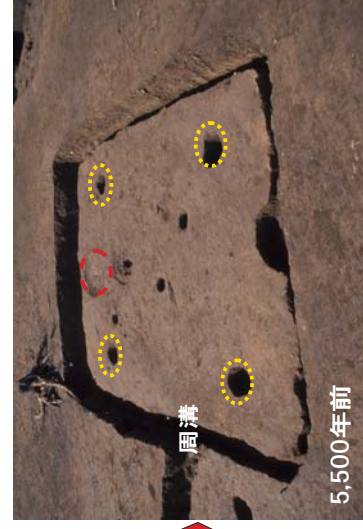
※ 柱は不明、炉は1ヶ所(—)



6,000年前

縄文時代前期(関山式期)の住居跡

※ 柱は6本(.....)、炉は1ヶ所(—)



5,500年前

縄文時代前期(黒浜式期)の住居跡

※ 柱は4本(.....)、炉は1ヶ所(—)



4,000年前

縄文時代中期(加曾利式期)の住居跡

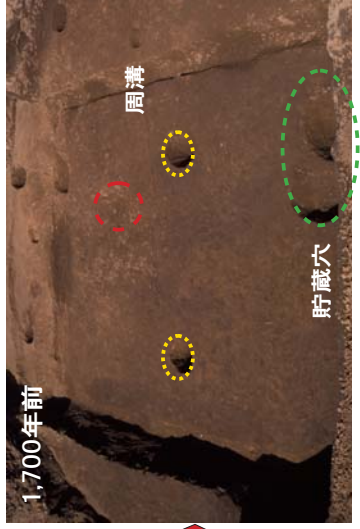
※ 柱は4本(.....)、炉は1ヶ所(—)。建替えが1回(細点が古い柱)行われている。



3,500年前

縄文時代後期(称名寺式期)の住居跡

※ 柱は周囲に廻り、炉は1ヶ所(—) 手前に入口を設置し、炉と入口の間に埋塞(うめがめ)と呼ばれる施設が設けられている。



1,700年前

古墳時代初期の住居跡

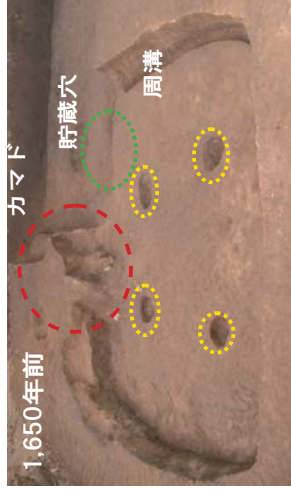
※ 柱は2本(.....)、炉は1ヶ所(—)、手前に貯蔵穴(ちよぞうけつ)とと呼ばれる保存用施設が設置される。一般的な住居の柱は4本。



1,400年前

古墳時代後期の住居跡

※ 柱は無い。炉から竈(かまど)と呼ばれる施設に変化し、貯蔵穴(---)も脇に設置され、調理場が確立される。一般的な住居の柱は4本。



1,650年前

奈良時代の住居跡

【 変遷の特徴と概略 】

縄文時代早期には、炉は奥側に設置され全体的傾向と同様ですが、柱は不明瞭です。入口は南側にあったと推測されますが、これは太陽の明かりを有効利用したものと考えられます。前期になると壁の廻りに周溝(しゅうこう)と呼ばれる溝状の施設が設置され、壁の補強兼排水施設(雨樋：あまどい)として機能していたと考えられます。中期になると全時代を通して方形の竪穴住居跡が基本であるものが、この時代のみ円形となりますが、柱の位置的な構造、施設等に変化はありません。後期には柄鏡形住居(えかがみがたじゅうきょう)と呼ばれる入り口施設を持つ

つ住居が出現し、柱も壁際に配置されています。晩期には再び方形となりますが、入り口施設はより明確に設置されています。弥生時代の住居は現在のところ発見されていませんが、この頃から貯蔵穴(ちよぞうけつ)と呼ばれる食物保存用施設が設置されます。古墳時代後期になると竈(かまど)が出現し、貯蔵穴も脇に設置され、調理場が確立されます。竈には「硬砂(かたすな)」と呼ばれる蓮田市周辺特有の硬い砂状の材質を利用して作られています。

※ 柱は4本(.....)。竈(かまど：---)は奥に、貯蔵穴(---)も脇に設置され、この時代も調理場が確立される。

時代を超えた蓮田への流通品

旧石器時代に本地域への交易ルートがわかるものとして黒曜石が挙げられます。黒曜石は産地が全国でも限定され、流通する地域も限られています。縄文時代以降とは異なり旧石器時代には、栃木県高原文産の黒曜石を多く持ち込み使用していることが特徴的です。これ以外には蓮田市内だけでなく、周辺地域のデータでも同様の結果が得られています。これ以外にも「頁岩(けつがん)」と呼ばれる石材も東北地方からの流入品であることが分かっています。この時代には渡良瀬川・思川の河川が唯一本地域を還流する大河川であり、川沿いのルートとして思川上流域から鬼怒川・会津西街道へと続くルートが人々の交易ルートになったものと考えられ、このルート上に位置する高原文産の黒曜石が持ち込まれたことが想定されます。旧石器時代の埴谷地域周辺の地形は、館林から伸びる半島状の「館林(たてばやし)・大宮台地(おおみやだいち)」と幸手市から松伏町にかけて僅かに掛かる下総台地が丘陵状に存在する外に、現在の中川低地中央部にも現地表下20m付近に平坦面が存在することが推測されています。

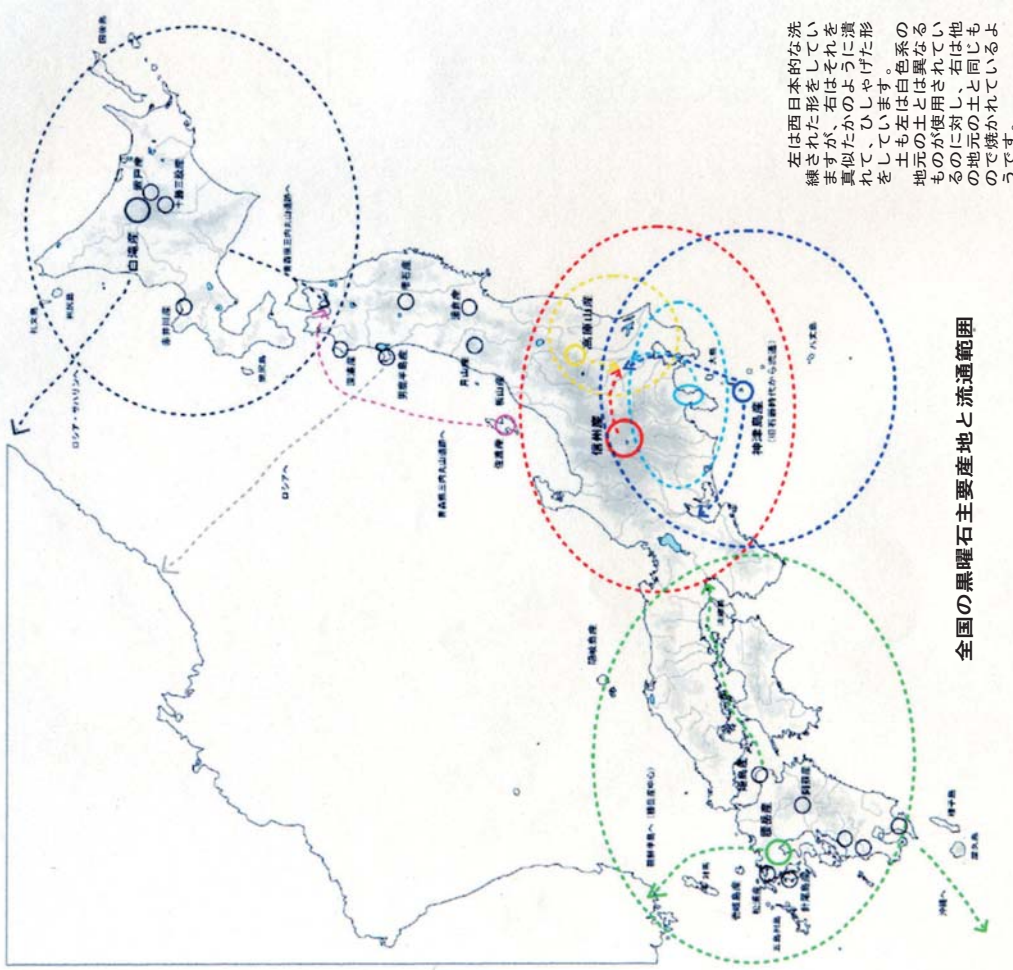
縄文時代に入り、黒曜石の交易ルートに変化が見られます。縄文時代前期に入ると神津島産が急激に増加し、高原文産は全く確認されません。縄文海進により蓮田の地まで深く海が入り込んでいたことにより、河川周辺の「川の道」だけでなく、「海の道」が存在したことを物語るデータでしょう。この傾向は中期まで続きますが、中期には信州産が増加します。後期以降になると再び高原文産が入り、様々な産地の黒曜石が万遍無く入ってきます。

これ以外のものでは、土器でも地域を知ることができますが、前期には西日本の北白川(きたしろかわ)下層(かそう)式土器や東北の大木式(だいきしき)土器、中期には日本海側の「火炎土器(かえんどぎ)」なども呼ばれる馬高式(うまたかしき)土器、晩期には東北の大洞式(おほぼらしき)土器が搬入されています。また、石器石材の中でも現在でもアークセサリーとして利用されている日本海側姫川流域を唯一の産地とした「翡翠(ヒスイ)」が中期以降に搬入されています。また、海の影響の無くなった後期の雅楽谷遺跡では外洋産サトウガイの貝輪やサルボウの貝輪、久台遺跡ではサルボウの貝輪が検出される等、海水影響域との交易や関連する資料の存在、久台遺跡での多量の「製塩(せいえん)土器」の検出などは、奥部から海域への進出や交易を物語る資料として捉えることができるでしょう。

弥生時代～古墳時代前半に至ると「新たな展開が見え、西日本からの「稲作文化」の伝承に伴うものか、流通品も畿内系の「手焙り形土器」が市内ではほぼ完形のものが出土されています。馬込八番遺跡から出土していますが、完形のものが出土した遺跡も蓮田のみです。他にも、東海系の「S字籬」、他にも北西関東系「吉ヶ谷式(よしがやつしき)土器」などからも交流の足跡を窺(うかが)い知ることができ、縄文時代とは異なり西日本からの影響が強く見受けられます。



縄文前期の海水浸入状況と黒曜石の流通



全国の黒曜石主要産地と流通範囲

左は西日本の洗練された形をしていますが、右はそれを真似たかのような形をして、ひしやけた形をしています。土元は白色系のものが多いが、右は他の地元の土元と同じように焼かれています。



手焙り形土器 ささら遺跡(左)と馬込八番遺跡(右)



運ばれてきた(?)火炎土器

宿下遺跡から発見された馬高式土器底部の破片です。この土器も土元が地元のものは異なり、運ばれてきたものと考えられます。